

大学生の実態と教員の印象とのギャップを明らかにする新手法 —学生たちが求める要素を取り入れた授業改善に向けて—

A unique method to clarify the gap between the actual situation of the student
and the impression of the student by the teacher

田中 友理¹ 上野 寛子² 小西 英行
TANAKA Yuri, UENO Tomoko, KONISHI Hideyuki

本研究では、より有効なFDを行うための新しい方法を開発することを目的とした。学生と教員の両方に同じ問いを設定するユニークな質問紙法によって、学生が授業に求めている要素を明らかにし、それらの要素が教員に実施されているかを問うことで、今後改善しなければならない点を具体的に把握できるようにすること、また、学生の学習動機に関する教員の印象と学生の実態を測定することで、学生に対する教員の「思い込み」を明らかにすることを試みた。学生用質問紙には現在の「やる気」の度合いを記入してもらう項目を設定し、「今よりもやる気が出る授業」を尋ねる設問で授業内容や教授法などの27項目のうち授業に望んでいる要素を明らかにした。同じ授業に関する要素について、教員がどの程度取り組んでいるかを調査した結果、「実施度高」と「実施度低」の大きく2つに分類された。これらの結果を組み合わせると、教員は実施していると回答しているが学生の改善希望度が最も高い要素を明らかにできた。これらは教員が実施していると認識するレベルでは学生にとって不十分である要素であり、学生と教員のギャップとして示された。さらに、改善希望度は最も高いが教員の実施度は低い要素を見出すことができた。この要素に含まれる内容を積極的に改善していけば、学生は今よりもやる気をもって授業に取り組むことができ、即効性のある授業改善が可能となる。また、本学現代社会学部の1年生から3年生において「51～75%」のやる気をもつ学生が過半数を占めたことから、この層が求める授業要素の改善を強化することで、大学全体の「やる気」の度合いを引き上げることが可能であることが示唆された。さらに、学習動機については、教員が思っているよりも「モラトリアム」や「外発性動機」が低く、「交友関係志向」や「将来志向」が高かったため、学生の実態とは異なる教員の「思い込み」があることが明確となった。偏見や思い込みを修正することは、目の前の学生に合った授業や指導を行うために不可欠である。学生が「今よりもやる気が出る」と考えている要素に注目した授業改善は、学習意欲を高め、学生の力を伸ばすだけでなく、大学における学習動機に変化をもたらし、大学生活や卒業後の人生を前向きに進めていくことにつながるだろう。

キーワード：やる気の度合い、授業改善、学習動機、大学生、教員、ギャップ

¹ 明治学院大学心理学部

² 明治学院大学教養教育センター

1. 研究の背景と目的

1999年、FD実施の努力義務が定められて以降、FDに取り組む大学は年々増え続け、2006年度には628大学(86.0%)となった。その内容は「講演会等の開催」が最も多かった(416大学:60.0%)。2008年のFD義務化以降、2012年度時点でも、「講演会、シンポジウム等の開催」が最も多く(494大学:64.4%)、「教員相互の授業参観」(384大学:50.1%)、「教育方法改善のためのワークショップまたは授業検討会」(341大学:44.5%)が続いた(文部科学省2014)。2012年度は107大学(13.9%)において専任教員全員がFD活動に参加した。専任教員のうちFD活動に参加したのは4分の3以上(であるが全員ではない)と回答した大学が最も多く、254大学(33.1%)であった。しかし、両方を合わせても47%に過ぎない。過半数の大学においてはFD活動に参加した専任教員の割合はさらに低く、FD活動に参加していない教員がかなりいるということになる。以前から指摘されてきたが、教育面の業績評価が依然として不十分であるため、FD活動のインセンティブが働きにくいことがFD活動の持続性を妨げていると考えられる。こうした中、実質的に有効なFDとなるための取り組みを行っている大学がある。京都外国語大学・京都外国語短期大学(学生総数約4,800名)では年間を通して積極的にFD活動に取り組んでおり、教授会構成教員(約100名)が全員参加する「夏期専任教員研修会(宿泊FD:9月実施)」では、外部講師による講演、校内教員によるパネルディスカッションやラウンドテーブルなどを取り入れ、教員の意識向上をはかっている。年度末の「授業担当者打合せ会議」には専任教員のみならず非常勤講師も出席し、教員全員で大学全体の授業に関する問題について考える場が設けられるなど、授業改善・教育改革において教員同士が密に連携した有機的なFDが行われている(平山2011)。宿泊FDや、現状認識の共有と研鑽を非常勤講師まで含めて行っている点についてはいまだ先進的で注目に値する。

授業改善の素材として重要かつ基本的なものは「学生による授業評価」である。2012年度はこれまでの最高数に相当する722大学(94.1%)で実施された。授業評価項目として最も多く取り入れられているのが、「授業のわかりやすさ」である(702大学:91.4%)。次に、「内容の理解度」(653大学:85%)、「授業に対する興味、関心」(629大学:81.9%)、「授業中の態度(意欲など)」(620大学:80.7%)、「担当者の熱意・意欲」(618大学:80.5%)、「担当者の話し方、声のボリューム」(616大学:80.2%)と続く。こうした項目は多くの大学が授業改善に重要だと考えているといえる。しかし、結果については各項目について平均値と比べた単純なものであり、授業改善の素材として活用ができていないかは不明である。これまで、学生による授業評価アンケートのデータにCS(Customer Satisfaction:顧客満足度)分析の考え方を導入し、授業に対する総合的な満足度を高めるための改善点を定量的に示す試みがなされたり(松本・塚本2004)、データをもとに担当教員の教育効果、科目の履修価値、授業への満足度などがどういった変数によって決まってくるかを検討することにより、例えば、授業理解は授業進度や出席に比較的大きな影響を受けるのに対し、総合判断(有用性)は教員の学生に対する接し方や話し方、熱意や私語注意といった要素に大きく影響されることが示唆されるといったことを導き出す興味深い試行がなされている(米谷2007)。全学生の意見を集めることができる「学生による授業評価」を授業改善に有効活用できるような汎用性のある分析方法が必要とされている。

大学全入時代においては、多様な学生が高等教育を受けているが、そもそも入学時から学力が

不足していることや、学ぶ意欲や将来の目的をもたない学生が含まれ、伝統的な一方通行型の教授法では学生の能力を伸ばすことができなくなっている。FDの義務化以降、「学生の主体的な学び」へと大学教育の質的転換が謳われるようになり（中央教育審議会 2008、2012、文部科学省 2012）、大学教育が「学習者主体」へとパラダイムシフトする中、教員－学生間の双方向性を取り入れた授業開発が進められてきた（例えば、鈴木 2012、上野 2013）。したがって、授業改善を進めていくためには、大学で教育を受ける主体者である学生の意見はますます重要なものとなっている。岡山大学では、2001年に教育開発センターの正式な組織として「学生・教員FD検討会」を発足させ、2010年には「学生・教職員教育改善専門委員会」へと名称変更し、その後は「SweetFood」という愛称で知られている（天野 2012）。全学組織の委員会であるため、各学部から学生と教員が1名ずつ委員として推薦され、授業改善やシステム改善（物理的な学習環境や修学上の制度等）、学生交流といった3つのワーキンググループを作り、学生発案型授業の開講など大変ユニークな取り組みを息長く続けている。2009年夏には立命館大学で全国初の「学生FDサミット」が開催された。その後、毎年「学生FDサミット」が開かれ、全国の大学から学生、教員、職員が参加し、関心をもつ大学が年を追うごとに増加していった（木野 2012）。2012年度に国公立私立767大学を対象とした調査において、学生による授業評価の特徴的な取り組みとして最も多くみられたのは「授業アンケートの結果を組織的に検討し、授業内容等に反映する機会を設けている」（49.3%）であった。次に、「大学の授業に関し、学生自治会からの意見を聞く機会を設けている」（14.1%）や「FD活動に学生が参加している」（11.2%）といった、学生が何らかの形で教育の改善に関与しているという回答がみられたことから（文部科学省 2014）、FDへの学生参画という新たな形に希望を見出し、期待を寄せる大学が増えてきたといえる。しかし、学生の意見で大学を変えていくことの難しさに加え、そもそも一部の学生の意見を取り入れることで多様な学生に対し効果があるのか、また、こうした方法がどの大学でも有効かといった点は十分な検証がなされていない。

2014年6月、大学運営における学長のリーダーシップを確立し、ガバナンス改革を促進するため、教授会の権限が限定的となるよう学校教育法が改正された。FDが義務化されても大学改革はなかなか進まないため、大学を完全なトップダウンとすることを法的に担保することにより、改革のスピードアップを狙ったものである。それほどまでに教学改革は難航している。

富山国際大学現代社会学部では、非常勤講師が少なく、授業のほとんどを専任教員が担当している。FD義務化以降、外部講師を招聘したFD研修会を毎年行うことによって、教職員のFDに対する意識を高めてきた。2013年4月には「FD委員会」を発足させ、FD研修会に専任教員が全員参加し、定期的に授業参観をするなど授業改善に向けて積極的に研鑽を積んでいる。本研究では、このような態勢をもつ大学において、より一層有効なFDとなるための新しい方法を開発することを目的とする。すなわち、従来からある授業評価アンケートではなく、「今よりもやる気が出る」と考える授業の要素について学生に回答してもらうことにより目の前の学生が授業に求めている要素が明確にでき、学習動機や学生の特性を把握することで、今後、授業や学生指導にいかせる学生の実態調査アンケートを、一部の学生ではなく学生全員を対象としてとる一方で、教員には学生の実態調査アンケートと同じ項目で、教員が学生に対しどう思っているのかを問い、大学生の実態と教員の印象とのギャップを明らかにすることを試みた。

2. 方法

富山国際大学現代社会学部の学生および教員を対象にして、大学の授業や学生の学習動機に関する質問紙調査を行った。以下、学生に対する質問紙および教員に対する質問紙について、それぞれの回答者、調査の実施方法、質問紙の構成について記す。

2-1. 学生に対する質問紙

2-1-1. 調査対象者

現代社会学部の3専攻（観光・環境デザイン・経営情報）に属する学生240人を調査対象とした。そのうち1人は回答に不備があったことから、239人を分析対象とした。学年の内訳は1年生95人、2年生71人、3年生62人、4年生9人、無記入2人であった。

2-1-2. 調査時期

2014年11月下旬から12月にかけて実施された。

2-1-3. 調査方法

個別自記入形式の質問紙により集合調査形式で調査された。本調査については、授業開始後に担当の教員による口頭での説明と質問紙の表紙に記載された文書により説明合意がなされた。謝礼は提示していない。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約10～15分であった。

2-1-4. 調査内容

本調査の質問紙を、付表1に記す。質問紙は表1に示すように、(1)から(5)により構成された。

表1 学生に対する質問紙の構成

-
- | |
|----------------------------|
| (1)表紙・フェイスシート |
| (2)「やる気」についての質問 |
| (3)「やる気が出る授業」についての質問 |
| (4)大学で学ぶ動機についての質問(國吉 2007) |
| (5)大学や授業に対する要望 |
-

(1) 表紙・フェイスシート

表紙には、依頼文と回答の仕方を表記した。依頼文には本調査の目的や、回収されたデータの取り扱いに関する説明が含まれた。また、表紙の下部において、学年についての記入を求めた。

(2) 「やる気」についての質問

大学の授業に対する姿勢を把握するための項目である。「あなたは授業に、何%くらいのやる気(授業を集中して聞き、内容を理解しようとする気持ち)をもって臨んでいると思いますか。」という質問に対し、自らに最も近いと思うものを「A (0～25%)」、「B (26～50%)」、「C (51～75%)」、「D (76～100%)」から選ぶように求めた。

(3) 「やる気が出る授業」についての質問

学生が授業に何を求めているかを測定するための項目である。学生が大学の授業に出席するに

あたり、どのように授業が変われば「今よりもやる気が出る」と思うかについて、27の質問項目に対し回答を求めた。各項目は、授業評価における評価項目を参考に（文部科学省 2012）、独自で作成した。27項目それぞれについて、「1. 全くそう思わない」～「6. 非常にそう思う」の6件法で回答を求めた。

(4) 大学で学ぶ動機についての質問（國吉 2007）

学生の学習動機を測定するための質問項目である。國吉（2007）の作成した、「大学で学ぶ動機」についての質問項目を使用した。28項目それぞれについて、「1. 全くあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」の4件法で回答を求めた。

(5) 大学や授業に対する要望

大学や授業に対して、学生が改善してほしいと思う点についての項目である。自由記述形式で回答を求めた。

2-2. 教員に対する質問紙

2-2-1. 調査対象者

現代社会学部の3専攻（観光・環境デザイン・経営情報）に所属する教員18人を調査対象とした。

2-2-2. 調査時期

2014年12月10日に開催された現代社会学部第2回FD研修会において実施された。

2-2-3. 調査方法

個別自記入形式の質問紙により集合調査形式で調査された。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約10～15分であった。

2-2-4. 調査内容

本調査の質問紙を、付表2に記す。質問紙は表2に示すように、(1)から(4)により構成されていた。

表2 教員に対する質問紙の構成

(1)表紙
(2)授業に対する取り組みについての質問
(3)学生が大学で学ぶ動機についての質問(國吉 2007)
(4)学生のやる気を引き出すための取り組み

(1) 表紙

表紙には、依頼文と回答の仕方を表記した。依頼文には本調査の目的や、回収されたデータの取り扱いに関する説明が含まれた。

(2) 授業に対する取り組みについての質問

教員の授業に対する取り組みについての項目である。教員が普段の授業でどの程度取り組んでいるかについて、27の質問項目に対し回答を求めた。各項目は、「学生に対する質問紙」の質問

項目と対応させて作成した。27項目それぞれについて、「1. 取り組んでいない」～「4. とても取り組んでいる」の4件法で回答を求めた。

(3) 学生が大学で学ぶ動機についての質問 (國吉 2007)

学生の学習動機について、教員がどのように捉えているかを測定するための質問項目である。國吉 (2007) の作成した「大学で学ぶ動機」について28の質問項目を使用し、本学の学生にどの程度あてはまると思うかを評定させた。28項目それぞれについて、「1. 全くあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」の4件法で回答を求めた。

(4) 学生のやる気を引き出すための取り組み

学生が今よりも授業に対するやる気を出せるようにするために、教員が行っている取り組みを問う項目である。学生を「やる気があまりない学生」「やる気がある学生」「中間層」に分けたとき、それぞれの学生に意識して取り組みを行っている場合は具体的に記述してもらうよう自由記述形式 (箇条書き) で回答を求めた。

3. 結果

3-1. 大学の授業に臨む「やる気」の度合い

学生に対する質問紙の「2-1-4. (1) 「やる気」についての質問」の集計を行った。

学生の授業に臨む「やる気」の度合いについては、「0～25%」が1人 (2年生1人)、「26～50%未満」が41人 (1年生19人、2年生4人、3年生13人、4年生5人)、「51～75%」が112人 (1年生50人、2年生30人、3年生28人、4年生3人、学年無記入1人)、「76～100%」が41人 (1年生16人、2年生13人、3年生11人、学年無記入1人)、やる気無回答が44人 (1年生10人、2年生23人、3年生62人)であった (図1)。全学年で見ると、授業に臨む「やる気」の度合いは「51～75%」が最も多かった。

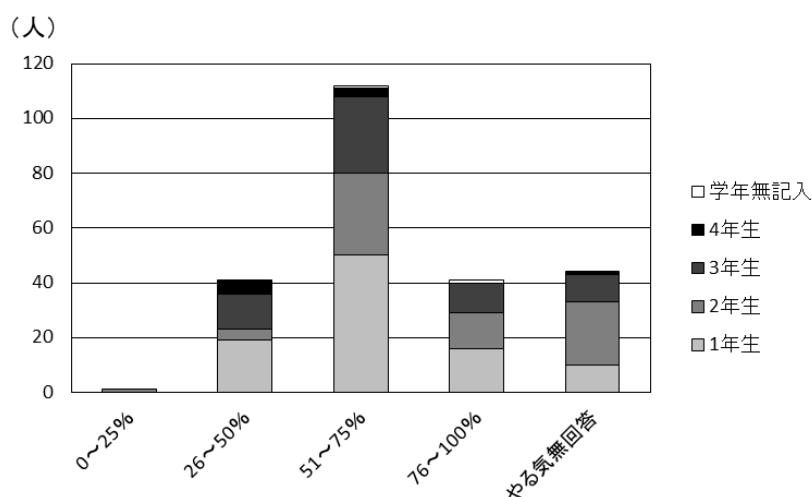


図1 学生の授業に臨む「やる気」の度合い

図1をもとに、授業に臨む「やる気」の度合いを学年ごとに示したところ、1年生95人では「26～50%」が19人(20%)、「51～75%」が50人(53%)、「76～100%」が16人(17%)、「やる気無回答」が10人(11%)であった。2年生71人では「0～25%」が1人(1%)、「26～50%」が4人(6%)、「51～75%」が30人(42%)、「76～100%」が13人(18%)、「やる気無回答」が23人(32%)であった。3年生62人では「26～50%」が13人(21%)、「51～75%」が28人(45%)、「76～100%」が11人(18%)、「やる気無回答」が10人(16%)であった。4年生9人では「26～50%」が5人(56%)、「51～75%」が3人(3%)、「やる気無回答」が1人(11%)であった。学年無記入2人では「26～50%」が1人(56%)、「51～75%」が1人(50%)であった(図2)。1年生から3年生においては、約半数の学生が「51～75%」(1年生53%、2年生42%、3年生45%)と回答した。また、1年生と3年生においては、「26～50%」と、「76～100%」と答えた学生の割合が同程度であった(1年生は「26～50%」が20%、「76～100%」が17%、3年生は「26～50%」が21%、「76～100%」が18%)。

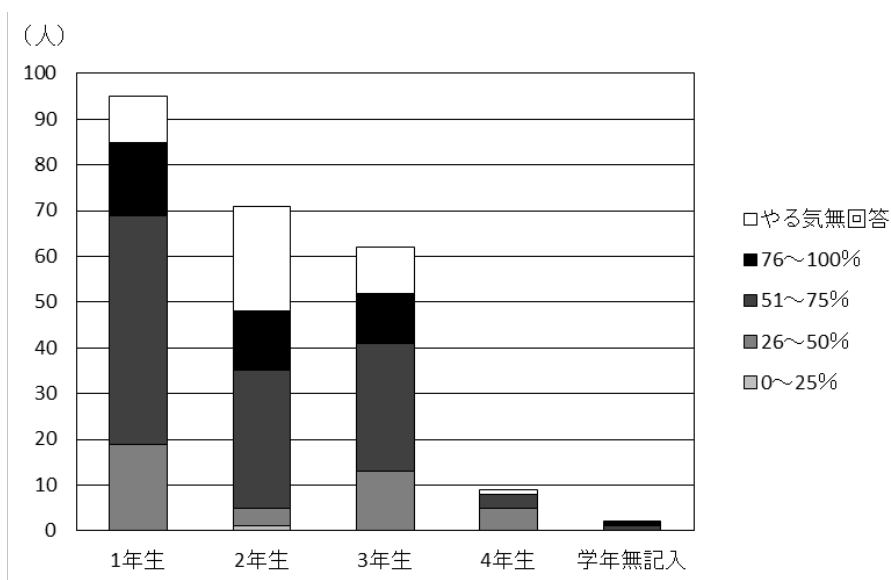


図2 学生の授業に臨む「やる気」の度合い(学年別)

3-2. 学生にとっての「今よりもやる気が出る授業」とは

学生に対する質問紙の「2-1-4. (3)「やる気が出る授業」についての質問」の分析を行った。やる気無回答の44人を除き、また、「0～25%」と回答したのは1人であったため、分析から除外した。以降、計194人に対して分析を行った。

3-2-1. クラスタ分析

授業に関する質問項目を、学生が授業に求める度合いによって分類するため、クラスタ分析を行った。まず、各項目について「やる気」の度合い別に得点の平均値を算出した。それぞれの平均値を用いてWard法によるクラスタ分析を行った結果、4つに分類された(表3)。

表3 クラスタ分析による4分類

第1クラスタ(8項目)

先生の声の大きさが、ちょうどよい。
先生の滑舌がよく、話している内容がちゃんと聞き取れる。
板書やパワーポイントなどが見やすい。
配布資料が見やすく、分かりやすい。
文章だけでなく、図や動画などを活用して説明している。
教室の室温が、適切に管理されている。
授業の内容が、興味や関心が持てるものである。
授業の内容が、自分の見識を広げるものである。

第2クラスタ(10項目)

先生が遅刻せず、授業の開始時間がきちんと守られている。
先生の話すスピードが、ちょうどよい。
先生が、具体例や先生自身の体験談など、理解の助けになる解説をしてくれる。
先生が、専門的な内容であっても、自分の身近なことに繋げられるように説明をしてくれる。
授業の進むスピードが、ちょうどよい。
楽しい授業である。
成績評価の基準が分かりやすい。
自分の成績に対し、なぜ自分がその成績を取ったのかの納得がいく。
授業の内容が、ためになるものである。
授業の内容が、就職や進学に役立つものである。

第3クラスタ(6項目)

授業の難易度が、ちょうどよい。
受講人数に対して、ちょうどよい大きさの教室である。
コメントペーパーなどでの学生の意見(授業方法に対する意見など)に対し、改善がなされる。
コメントペーパーなどでの学生の質問(授業内容等に関する疑問など)に対し、答えてくれたり、解説してくれたりする。
レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削が行われ、返却される。
授業の内容が、専門性の高いものである。

第4クラスタ(3項目)

授業中の私語や出入りに対し厳しく注意がなされている。
先生が、難しい言葉を使わずに説明をしてくれる。
翌週の授業が待ち遠しくなるほどの授業である。

3-2-2. クラスタごとの特徴

クラスタごとの特徴を明らかにするため、学生の授業に臨む「やる気」の度合い別に、各クラスタにおける「学生が授業に求める度合い」の評定点の平均値を示した(図3)。

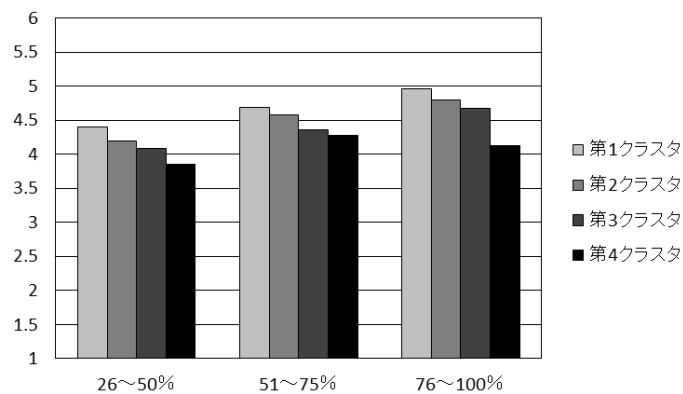


図3 「学生が授業に求める度合い」の評定点の平均値（やる気の度合い別）

各クラスタの評定平均値間に差があるかを検討するため、クラスタを独立変数とし、「学生が授業に求める度合い」の評定点を従属変数として、「やる気」の度合いごとに一要因分散分析を行った(表4)。その結果、どの「やる気」の度合いにおいても5パーセント水準で有意な差が見られた(「26~50%」: $F(3,120) = 8.31, p < 0.001$, 「51~75%」: $F(3,333) = 26.16, p < 0.001$, 「76~100%」: $F(3,120) = 31.95, p < 0.001$)。そのため、Ryan法で多重比較を行ったところ、表5の結果が得られた。第1クラスター-第3クラスタ、第1クラスター-第4クラスタ、第2クラスター-第4クラスタに関しては、すべてのやる気の度合いにおいて得点に有意な差がみられた。さらに、「51~75%」でのみ第2クラスター-第3クラスタ間に有意な差が、「76~100%」でのみ第3クラスター-第4クラスタに有意な差が見られた。

表4 「学生が授業に求める度合い」の評定点の平均値と標準偏差（やる気の度合い別）

	26~50%(n=41)		51~75%(n=112)		76~100%(n=41)	
	M	SD	M	SD	M	SD
第1クラスタ	4.40	1.02	4.69	0.82	4.96	0.58
第2クラスタ	4.19	0.87	4.58	0.73	4.80	0.64
第3クラスタ	4.08	0.85	4.36	0.71	4.67	0.71
第4クラスタ	3.85	1.01	4.27	0.84	4.12	0.88
F値	8.31***		26.16***		31.95***	

*** $p < 0.001$

表5 Ryan法によるクラスタ間における平均対多重比較

	26~50%	51~75%	76~100%
第1クラスター-第2クラスタ	n.s.	n.s.	n.s.
第1クラスター-第3クラスタ	*	*	*
第1クラスター-第4クラスタ	*	*	*
第2クラスター-第3クラスタ	n.s.	*	n.s.
第2クラスター-第4クラスタ	*	*	*
第3クラスター-第4クラスタ	n.s.	n.s.	*

3-3. 授業に対する教員の取り組み

「2-2-4. (2) 授業に対する取り組みについての質問」について、教員 18 人の回答をもとに分析を行った。

3-3-1. クラスタ分析

授業に関する質問項目を、教員が取り組んでいる度合いによって分類するため、クラスタ分析を行った。まず、各項目についての得点の平均値を算出した。それぞれの平均値を用いて Ward 法によるクラスタ分析を行った結果、2 つに分類された (表 6)。

表 6 クラスタ分析による 2 分類

第1クラスタ(10項目)

- 遅刻せず、授業の開始時間をきちんと守っている。
- 声の大きさが適切であるようにしている。
- 話すスピードが適切であるようにしている。
- なるべく難しい言葉を使わずに説明をしている。
- 具体例や自身の体験談など、理解の助けになる解説をしている。
- 専門的な内容であっても、学生にとって身近なものと繋げられるように説明をしている。
- 受講人数に対して、ちょうどよい大きさの教室であるようにしている。
- 授業の内容が、ためになるものであるようにしている。
- 授業の内容が、興味や関心が持てるものであるようにしている。
- 授業の内容が、自分の見識を広げるものであるようにしている。

第2クラスタ(17項目)

- 授業中の私語や出入りに対し厳しく注意をしている。
 - 滑舌がよく話し、話している内容がちゃんと聞き取れるようにしている。
 - 文章だけでなく、図や動画などを活用して説明している。
 - 配布資料が見やすく、分かりやすいものであるよう、工夫している。
 - 板書やパワーポイントなどが見やすいものであるよう、工夫している。
 - 授業の進むスピードを、学生に合わせている。
 - 授業の難易度を、学生に合わせている。
 - 楽しい授業であるようにしている。
 - 教室の室温を、適切に管理している。
 - レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削が行い、返却している。
 - コメントペーパーなどでの学生の意見(授業方法に対する意見など)に対し、改善策を取っている。
 - コメントペーパーなどでの学生の質問(授業内容等に関する疑問など)に対し、答えたり、解説したりする。
 - 成績評価の基準を学生に分かりやすく示している。
 - 学生が、なぜ自分がその成績を取ったのか、納得がいくように評価している。
 - 授業の内容が、専門性の高いものであるようにしている。
 - 授業の内容が、就職や進学に役立つものであるようにしている。
 - 翌週の授業が待ち遠しくなるほどの授業であるようにしている。
-

3-3-2. クラスタごとの特徴

各クラスタにおける「教員が取り組んでいる度合い」の評定点の平均値を示した(図4)。評定平均値が最も高かったのが第1クラスタであり($M=3.27$ 、 $SD=0.40$)、次いで第2クラスタ($M=2.84$ 、 $SD=0.41$)であった。

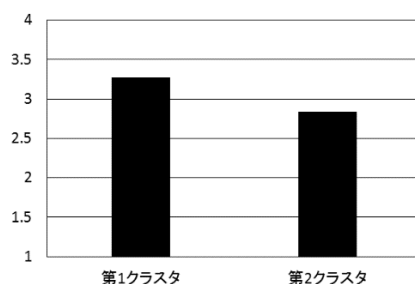


図4 各クラスタにおける「教員が取り組んでいる度合い」の評定点の平均値

クラスタを独立変数、「教員が取り組んでいる度合い」の得点を従属変数とした、対応のある t 検定を行った。その結果、5パーセント水準で有意な差が見られ ($t(17)=8.852$, $p<0.001$)、第1クラスタの得点平均の方が、第2クラスタの得点平均に比べて高いことが示された。そこで、第1クラスタを「実施度高」、第2クラスタを「実施度低」と名付けた。

3-4. 学生が大学で学ぶ動機

学生に対する質問紙の「2-1-4. (4) 大学で学ぶ動機についての質問」、および、教員に対する質問紙の「2-2-4. (3) 学生が大学で学ぶ動機についての質問」についての分析を行った。

3-4-1. 因子分析結果

大学で学ぶ動機についての質問 28 項目について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、解釈可能性から 6 因子を抽出した。因子負荷量の基準値は $|0.35|$ 以上とした。「自分の視野を広げたい」「新しいことを知りたい」「学ぶことが将来役立つ」「異性の友だちと遊びたい」の 4 項目は、どの因子も基準値を満たさなかった、または、複数の因子に基準値以上の負荷量を示したため、削除した。これら以外の 24 項目については、すべて $|0.40|$ 以上の因子負荷量を示した(表7)。第1因子に負荷量が高い項目は、自分を高めるための動機を評定している因子であると解釈されたため、第1因子を「向上心」因子と名付けた。第2因子に負荷量が高い項目は、幅広い人との交流を持つための動機を評定している因子であると解釈されたため、第2因子を「交友関係志向」因子と名付けた。第3因子に負荷量が高い項目は、社会に出る準備が整っていないことを評定している因子であると解釈されたため、第3因子を「モラトリアム」因子と名付けた。第4因子に負荷量が高い項目は、学歴を得ることを目的とすることを評定している因子であると解釈されたため、第4因子を「学歴志向」因子と名付けた。第5因子に負荷量が高い項目は、外発的な動機づけを評定している因子であると解釈されたため、第5因子を「外発性動機」因子と名付けた。第6因子に負荷量が高い項目は、自分の将来像を模索することを評定している因子であると解釈されたため、第6因子を「将来志向」因子と名付けた。

表7 「大学で学ぶ動機についての質問」の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
第1因子：向上心 ($\alpha=0.87$)								
専門的な勉強をしたい	2.95	0.73	0.88	-0.03	0.05	0.03	-0.09	-0.15
自分をより高めたい	3.09	0.69	0.75	-0.07	-0.01	-0.11	-0.01	0.17
教養を身につけたい	3.14	0.70	0.70	-0.01	0.03	0.15	-0.02	-0.02
自分の可能性を試したい	2.69	0.75	0.68	-0.06	0.03	-0.18	0.20	0.15
資格を取りたい	3.00	0.80	0.61	0.08	0.08	0.19	0.00	-0.19
将来希望する職業に就きたい	3.14	0.78	0.58	0.08	-0.14	0.27	-0.04	-0.14
本当の自分を見極めたい	2.86	0.79	0.55	0.01	0.06	-0.18	0.18	0.33
第2因子：交友関係志向 ($\alpha=0.86$)								
大学で十分に遊びたい	2.96	0.84	-0.15	0.81	0.06	-0.04	0.14	-0.10
友だちを作りたい	3.10	0.80	0.11	0.80	-0.01	-0.14	0.03	0.06
楽しい大学生活を経験したい	3.19	0.76	-0.02	0.76	-0.05	-0.03	-0.01	0.14
色々な人と知り合いたい	3.18	0.76	0.04	0.74	-0.02	-0.03	-0.12	0.15
第3因子：モラトリアム ($\alpha=0.78$)								
社会に出る自信がない	2.45	0.95	0.19	-0.03	0.92	-0.07	-0.15	-0.07
就職する気にならない	2.22	0.99	0.00	0.01	0.78	-0.08	0.06	0.04
特にやりたいことがない	2.49	0.97	-0.18	-0.12	0.57	0.16	0.03	0.23
学生をやっていたい	2.64	0.96	-0.05	0.29	0.44	0.18	0.08	-0.11
第4因子：学歴志向 ($\alpha=0.82$)								
大学卒の学歴が欲しい	3.09	0.84	-0.11	-0.07	-0.01	0.82	0.10	0.16
学歴がある方が得だから	2.91	0.88	0.03	-0.10	0.09	0.75	0.02	0.09
いい仕事をみつけるため	3.03	0.81	0.23	-0.01	-0.09	0.68	0.02	0.11
第5因子：外発性動機 ($\alpha=0.84$)								
進学しないと親に悪いから	2.32	0.91	0.04	0.03	-0.15	0.07	0.88	-0.07
親に進学を勧められて	2.37	0.95	0.01	0.00	0.02	0.01	0.78	-0.02
周りの人が進学するので	2.29	0.95	0.01	0.01	0.18	0.12	0.63	-0.03
第6因子：将来志向 ($\alpha=0.73$)								
したいことを探したい	3.21	0.76	-0.11	0.12	0.07	0.23	-0.06	0.64
立派な人間になりたい	3.10	0.81	0.31	0.10	-0.05	0.04	-0.06	0.42
自分の将来を考えたい	3.28	0.72	0.13	0.22	-0.03	0.23	-0.12	0.40
因子間相関			第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
第1因子			—	0.50	-0.07	0.32	0.16	0.44
第2因子				—	0.11	0.35	0.13	0.44
第3因子					—	0.25	0.48	-0.05
第4因子						—	0.32	0.11
第5因子							—	0.10
第6因子								—

3-4-2. 学生が大学で学ぶ動機についての実態と教員がもつ学生の印象

学生による「2-1-4. (4) 大学で学ぶ動機についての質問」の得点の平均値と、教員による「2-2-4. (3) 学生が大学で学ぶ動機についての質問」の得点における因子ごとの平均値を示した(図5)。なお、分析にはこの設問が無記入であった学生2人と教員1人を除き、学生237人と教員17人の回答を用いた。

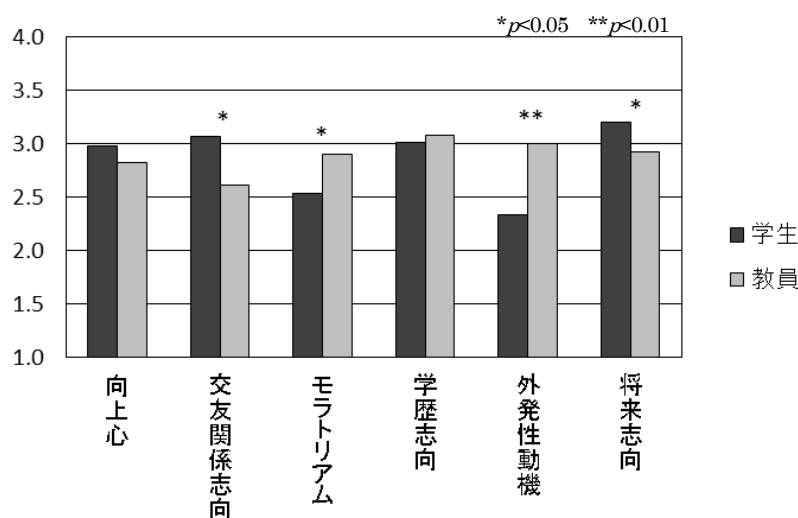


図5 学生と教員の「学生が大学で学ぶ動機についての質問」得点の平均値

学生に対する教員の印象と学生の実態との差があるかを検討するため、平均得点について因子ごとに t 検定を行った (表8)。その結果、「交友関係志向」、「モラトリアム」、「外発性動機」、「将来志向」において5パーセント水準で有意な差がみられた。教員評定の平均値よりも、学生の平均値の方が高かったものは、交友関係志向 ($t(251) = 2.51, p < 0.05$) と将来志向 ($t(251) = 1.66, p < 0.05$) であった。学生の平均値よりも、教員評定の平均値の方が高かったものは、モラトリアム ($t(18.9) = 2.91, p < 0.05$) と、外発性動機 ($t(251) = 3.22, p < 0.01$) であった。

表8 学生と教員の「学生が大学で学ぶ動機についての質問」得点の平均値と標準偏差

	学生 (n=237)		教員 (n=17)		t値
	M	SD	M	SD	
向上心	2.98	0.55	2.81	0.32	1.95
交友関係志向	3.07	0.69	2.63	0.67	2.51 *
モラトリアム	2.53	0.75	2.96	0.56	2.91 *
学歴志向	3.01	0.72	3.08	0.61	0.40
外発性動機	2.33	0.81	3.00	0.63	3.22 **
将来志向	3.20	0.61	2.94	0.44	1.66 *

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

3-4-3. 「やる気」の度合いによる学生の大学で学ぶ動機の比較

学生の「やる気」の度合い別に、「大学で学ぶ動機についての質問」の得点における因子ごとの平均値を示した (図6)。なお、分析には26~50%、51~75%、76~100%と答えた193人 (26~50% : 40人、51~75% : 112人、76~100% : 41人) の回答を用いた。全体的に見ると、「モラトリアム」得点と「外発性動機」得点の平均値が低かった。

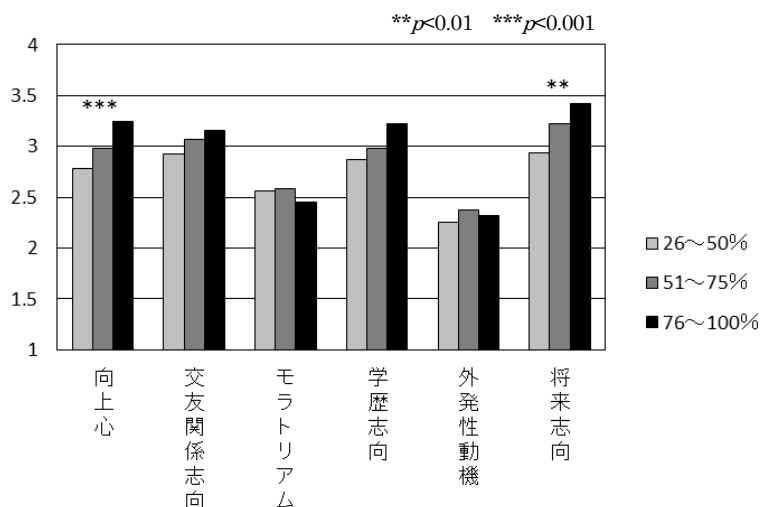


図6 学生の「大学で学ぶ動機についての質問」の得点平均値（やる気の度合い別）

学生の「やる気」の度合いによって差があるかを検討するため、「やる気」の度合いを独立変数とし、「大学で学ぶ動機についての質問」の得点を従属変数として、因子ごとに一要因分散分析を行った(表9)。その結果、5パーセント水準で有意な差がみられたのは、「向上心」($F(2,190)=7.50, p<0.001$)と「将来志向」($F(2,190)=6.62, p<0.01$) 因子であった。そのため、Ryan法(5%水準)で多重比較を行った(表10)。向上心においては「76~100%」の得点平均値が他2つと比較して高かった。将来志向においては、「26~50%」の得点平均値が他2つと比較して低かった。すなわち、「やる気」の度合いが高い学生は向上心が高く、「やる気」の度合いが低い学生の将来志向が低かった。

表9 「大学で学ぶ動機についての質問」の得点平均値と標準偏差（やる気の度合い別）

	26~50%(n=40)		51~75%(n=112)		76~100%(n=41)		F値
	M	SD	M	SD	M	SD	
向上心	2.78	0.54	2.98	0.56	3.24	0.47	7.50 ***
交友関係志向	2.93	0.83	3.07	0.64	3.16	0.75	1.11
モラトリアム	2.56	0.77	2.59	0.71	2.45	0.76	0.52
学歴志向	2.87	0.82	2.98	0.69	3.23	0.66	2.78
外発性動機	2.25	0.83	2.38	0.79	2.32	0.90	0.35
将来志向	2.93	0.76	3.22	0.59	3.42	0.45	6.62 **

*** $p<0.001$ ** $p<0.01$

表10 Ryan法による「やる気の度合い」間における平均対多重比較

	向上心	将来志向
「26~50%」-「51~75%」	n.s.	*
「26~50%」-「76~100%」	*	*
「51~75%」-「76~100%」	*	n.s.

3-5. 学生による大学や授業に対する要望

学生に対する質問紙の「2-1-4. (5) 大学や授業に対する要望」において、授業に関連する内容を表 11 にあげた。

表 11 授業に対する要望

学年	やる気	内容
1年生	26～50%	大きい教室での授業の際はマイクを使用して欲しいです。
1年生	51～75%	授業時間の徹底。
1年生	51～75%	授業の終了の時間をしっかりと守ってほしいです。
1年生	76～100%	机がガタガタして集中できません。椅子も座り心地が悪いものがあります。
1年生	76～100%	板書をもっと丁寧にしていただきたいです。話すスピードが速くてなかなかメモをとれないことがあるのでなるべく板書をしていただきたいです。
1年生	76～100%	もっとためになる授業をしてほしい。
2年生	やる気無回答	授業中に私たち自身が考える時間、先生が話し、それを考えさせられるだけでなく、挙げられた問題に対し、少数での話し合い、グループワークなどの大きなものではなく2～4人程度の集まりで話をする時間があって欲しい。
2年生	やる気無回答	授業のスピードにノートをとる作業がついていけない。興味のある分野を勉強したい。
2年生	やる気無回答	専門も少ないと思います。
2年生	やる気無回答	冬になると寒すぎる教室があるのであっためてほしい。
2年生	やる気無回答	もう少し授業のスピードをゆっくりにできませんか？
2年生	26～50%	黒板をあるていどまとめてほしい。
2年生	51～75%	時間内で終わってほしいです。
2年生	51～75%	大学全体の学力向上を考えてほしい。富大に行けなかったら国際大に行くという流れが作られています！！悔しいです。
2年生	51～75%	寒い時期にも早く暖房がつくようにしてほしい。
2年生	51～75%	授業のスピードに追いつかないときがあるのでもう少しゆっくりにしてほしい。
2年生	51～75%	授業は今の注目されている問題をもっと中心してください。
2年生	51～75%	選択できる講義が少ない。選択の幅をふやして、自分のより学びたい分野の専門的な学習、基礎教養分野の学習を行いたい。大切な講義の時間を利用してのこういったアンケートはやめてほしい。授業を進めるか、自習の時間として利用したい。
2年生	51～75%	専門性もっと高めます。
2年生	76～100%	遅れてきたり、スマホいじったり、寝てしまったりする人を怒るのはかまわないが、真面目にやっている人の授業時間がつぶれるので、長くなるなら授業後に怒ったり、短くスパッと終わらせてほしい。
2年生	76～100%	先生一本調子の授業はつまらない。教員の自己満。
2年生	76～100%	授業態度の悪い人に対して注意するのはいいが、周りの人の授業時間がけずられるので長ーい注意じゃなく、短くすばっと注意してほしい。真面目にうけている人がかわいそう。
3年生	51～75%	黒板に書いてあるものを書く時間がもう少しほしいです。
3年生	51～75%	成績評価を公平にしてほしいです。例えば全く出席していない人でもレポートを提出すれば単位がもらえるのは無いようにしてほしいです。
3年生	76～100%	黒板に書いてあるものを消すスピードが異常に早い。
3年生	76～100%	先生の板書がもっと詳しい方がよいと思う。
4年生	やる気無回答	授業の内容はちょっと難しいと思います。
4年生	26～50%	就活関連の授業回数を増やしてほしい。

3-6. 教員による学生のやる気を引き出すための取り組み

教員に対する質問紙の「2-2-4. (4) 学生のやる気を引き出すための取り組み」の結果をまとめると、以下のようになった。

学生が授業に対するやる気をより出せるようにするために、「やる気のあまりない学生」に対しては、個々人に対するコミュニケーションを重視した取り組みが多かった。「中間層」の学生に対しては、課題を出したりテストを行うといった取り組みがなされていた。「やる気のある学生」に対しては、関連図書を薦めるなど、授業外学習を促す取り組みが行われていた。

4. 考察

本研究の目的は、より有効なFDを行うための新しい方法を開発することであり、そのために学生と教員の両方に同じ問いを設定する質問紙法によって、学生の「やる気」の度合いを把握し、授業に望んでいることや学ぶ動機を明らかにしたうえで、教員の取り組みや学生に対する印象とのギャップを浮き彫りにした。これにより、学生が授業改善に求める要素を絞り込むことができ、多様な学生に対し、より適切な指導ができる可能性を示した。

まず、本学現代社会学部では、1年生から3年生までのどの学年でも「やる気」の度合いは「51～75%」が過半数を占めていることが示された。そのため、「51～75%は本学での「中間層」であり、それよりも低い「26～50%」は「やる気があまりない学生」、それよりも高い「76～100%」は「やる気がある学生」と言うことができる。1年生と3年生では「26～50%」と「76～100%」の占める割合が同程度であったことから、「やる気があまりない学生」と「やる気がある学生」は同程度存在することが明らかになった。なお、2年生では同様の結果が見られなかったが、これは他の学年に比べて無回答が多かったことが影響していると示唆された(71人中23人:32%が無回答)。全学年で「中間層」が最も多かったことから、「中間層」への対策を強化することで、大学全体の「やる気」の度合いを引き上げることができ、授業の質向上や大学の雰囲気が変わり、ひいては、自分の将来に対し意志の高い学生が増えると予想される。

次に、「今よりもやる気が出る授業」という質問項目を設定し、授業内容や教授法など授業についての要素27項目について回答を得たことにより、学生が授業に求めている要素を明らかにすることができた。本研究における「やる気」とは「授業を集中して聞き、内容を理解しようとする気持ち」である。「やる気」を高めることは学習意欲を高めることであり、学力向上につながると期待される。また、授業に対する「やる気」が高まることで、大学における学習動機に変化をもたらし、大学生生活や卒業後の人生を前向きに進めていくことにつながるだろう。学生が「今よりもやる気が出る」と考えている要素に注目した授業改善は、学生の力を伸ばす上でも、学生の今後の人生を切り拓くためにも、大変重要であると考えられる。

本学では授業についての要素を、やる気別の「学生が授業に求める度合い」によって、4つのクラスタに分類することができた。この分類によって、「やる気」の度合いごとに、学生が改善を希望している度合いを順位づけすることが可能となった(表12)。なお、クラスタの評定平均点をみると、どの「やる気」の度合いでも、すべてのクラスタが3.5を超えていた。したがって、どのクラスタに該当する要素であっても、学生はある程度は改善を求めていると考えられる。しかし、すべての要素を一度に改善することはきわめて困難であるため、他のクラスタと比較する

ことにより、改善の希望度が高いクラスタから順位づけをし、その順に従って改善に取り組むことが適切であると考えられた。

表 12 各クラスタの改善の希望度による順位づけ（「やる気」の度合い別）

やる気があまりない学生	第1クラスタ	>	第2クラスタ	>	第3クラスタ	>	第4クラスタ
中間層	第1クラスタ	≒	第2クラスタ	≫	第3クラスタ	≒	第4クラスタ
やる気がある学生	第1クラスタ	>	第2クラスタ	>	第3クラスタ	≫	第4クラスタ

≫:隣接するクラスタと有意な得点差があるため、順位づけができるもの
 >:隣接するクラスタと有意な得点差はみられないが、他のクラスタとの関係により順位づけができるもの
 ≒:隣接するクラスタと順位づけができないもの

「やる気があまりない学生」では、「学生が授業に求める度合い」の評定平均値は第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタ>第4クラスタの順で高く、第1クラスタは第3クラスタ・第4クラスタと有意な得点差があり、第2クラスタは第4クラスタと有意な得点差があった。このことから、各クラスタを「やる気があまりない学生」における改善の希望度で順位づけすると、第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタ>第4クラスタとなる。

「中間層」の学生では、「学生が授業に求める度合い」の評定平均値は第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタ>第4クラスタの順で高く、第2クラスタと第3クラスタ間に有意な得点差があった。このことから、各クラスタを「中間層」における改善の希望度で順位づけすると、第1クラスタ≒第2クラスタ≫第3クラスタ≒第4クラスタとなる。

「やる気のある学生」では、「学生が授業に求める度合い」の評定平均値は第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタ>第4クラスタの順で高く、第1クラスタは第3クラスタ・第4クラスタと有意な得点差があり、第2クラスタは第4クラスタと有意な得点差があった。また、第3クラスタと第4クラスタにも有意な得点差がみられた。このことから、各クラスタを「やる気がある学生」における改善の希望度で順位づけすると、第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタ≫第4クラスタとなる。

以上のことから、どの「やる気」の度合いであっても、改善の希望度は第1クラスタが最も高く、第2クラスタ、第3クラスタ、第4クラスタと続くことが明らかになった。そのため、第1クラスタは「改善希望度 A ランク」、第2クラスタは「改善希望度 B ランク」、第3クラスタは「改善希望度 C ランク」、第4クラスタは「改善希望度 D ランク」と呼ぶことにする。

「改善希望度 A ランク」に該当する授業の要素は、「教員の滑舌がよく、話している内容がちゃんと聞き取れる」「配布資料が見やすく、分かりやすい」のような、教授法的な内容であった。これらの内容は、「やる気」の度合いに関係なく学生に求められていることが分かる。また、成績評価やフィードバックに関する要素は、「やる気」の度合いによって求める程度に差があることが示唆された。例えば、「成績評価の基準が分かりやすい」は「改善希望度 B ランク」に該当し、「中間層」においては A ランクと同程度に改善が希望されている。「コメントペーパー等での学生の意見（授業方法に対する意見など）に対し、改善を行う」は「改善希望度 C ランク」に該当し、「やる気がある学生」においては「改善希望度 D ランク」よりも強く求められている。

これらの結果に、授業に対して教員が取り組んでいる度合い（「実施度高」と「実施度低」）を組み合わせると、学生と教員のギャップを明らかにし、取り組みの優先度を決定することができる（表13）。

表13 学生と教員のギャップ一覧

	学生の改善希望度	教員の実施度
1. 最優先で改善すべき項目		
1-1. 全学生においてギャップが見られ、更なる取り組みが必要な項目		
教員の声の大きさがちょうどよい。	A	高
授業の内容が、興味や関心を持てるものである。	A	高
授業の内容が、学生の見識を広げるものである。	A	高
1-2. 実施が不十分であるため、力を入れて取り組むべき項目		
教員の滑舌がよく、話している内容がちゃんと聞き取れる。	A	低
配布資料が見やすく、分かりやすい。	A	低
板書やパワーポイントなどが見やすい。	A	低
文章だけでなく、図や動画などを活用して説明している。	A	低
教室の室温が、適切に管理されている。	A	低
2. 1の改善後、改善すべき項目		
2-1. 特に多数派である「中間層」においてギャップが見られ、更なる取り組みが必要な科目		
教員が遅刻せず、授業の開始時間がきちんと守られている。	B	高
教員の話すスピードが、ちょうどよい。	B	高
教員が、具体例や教員自身の体験談など、学生の理解の助けになる解説をする。	B	高
教員が、専門的な内容であっても、学生の身近なことから繋げられるように説明してくれる。	B	高
授業の内容が、ためになるものである。	B	高
2-2. 力を入れて取り組むことで、特に多数派である「中間層」のやる気を高めることができる項目		
授業の進むスピードが、ちょうどよい。	B	低
学生にとって、楽しい授業である。	B	低
成績評価の基準が分かりやすい。	B	低
学生が、なぜ自分がその成績を取ったのかの納得がいく。	B	低
授業の内容が、就職や進学に役立つものである。	B	低
3. 1、2の改善後、改善すべき項目		
3-1. 力を入れて取り組むことで、「やる気のある学生」のやる気を高めることができる項目		
授業の難易度が、ちょうどよい。	C	低
レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削が行われ、返却される。	C	低
コメントペーパー等での学生の意見(授業方法に対する意見など)に対し、改善を行う。	C	低
コメントペーパー等で受けた学生の質問(授業内容等に関する疑問など)に答える・解説を行う。	C	低
授業の内容が、専門性の高いものである。	C	低
受講人数に対して、ちょうどよい大きさの教室である。	C	高
4. 1～3の改善後、改善すべき項目		
4-1. 現状の取り組みでよい項目		
教員が、難しい言葉を使わずに説明してくれる。	D	高
4-2. 取り組みの優先度が低い項目		
授業中の私語や出入りに対し厳しく注意がなされている。	D	低
学生にとって、翌週の授業が待ち遠しくなるほどの授業である。	D	低

注: 学生の改善希望度はA>B>C>Dの順で高い

「1-1. 全学生においてギャップが見られ、更なる取り組みが必要な項目」は、教員自身は全体的に実施していると回答しているが、やる気問わず学生の改善希望度が高い内容である。すなわち、教員が実施していると認識するレベルでは学生にとって不十分であることを示す。次に、「1-2. 実施が不十分であるため、力を入れて取り組むべき項目」は、やる気問わず学生の改善希望度は最も高いが、教員の実施度は低い内容である。これらの内容は現在あまり実施されていないため、積極的に改善していけば授業改善の効果が出やすく、学生は今よりもやる気をもって授業に取り組むことができるようになるといえる。また、これら2項目以外で注目すべき点は、「2-1. 特に多数派である「中間層」においてギャップが見られ、更なる取り組みが必要な科目」と「2-2. 力を入れて取り組むことで、特に多数派である「中間層」のやる気を高めることができる項目」である。前述したとおり、全学年で「中間層」が最も多かったことから、「中間層」への対策を強化することは、大学全体の「やる気」の度合いを引き上げることにつながる。そうなれば、現状で50%以下の「やる気」しかない学生の意識向上も期待できる。さらに、現状で76~100%の「やる気」のある学生は、「3-1. 力を入れて取り組むことで、「やる気のある学生」のやる気を高めることができる項目」にあるように、主にフィードバックを求めている。知識欲が旺盛で、自分が理解できていない点について明確にした上できちんと理解したいという、自己向上心が高い学生にとっては特に重要な改善内容であるといえる。学生の改善希望度が低い中でも、教員の実施度が高い項目は、現状の取り組みで学生が満足しているといえるため、「4-1. 現状の取り組みでよい項目」とした。学生の改善希望度も教員の実施度も低い項目は「4-2. 取り組みの優先度が低い項目」とした。このように、データに基づく分析結果を照らし合わせることにより、授業改善の優先度を明らかにすることができ、効率的かつ効果的な授業改善が可能となる。

学生が学ぶ動機に関する、教員の印象と学生の実態におけるギャップも明らかになった。学生自身は、教員が思っているよりも「モラトリアム」や「外発性動機」が低く、「交友関係志向」や「将来志向」が高かった。すなわち、教員が思っているほど消極的な理由によって大学で学んでいるのではなく、むしろ学生は、さまざまな人との出会いや、将来について考えるために大学で学んでいることが示唆された。これにより、学生の実態とは異なる教員の「思い込み」があることが明確となった。教員の思い込みは授業実践にも影響する。例えば、学生が学びに対して消極的であると教員が思い込んでいる状態では、「学生が真面目に授業に取り組まないのは、授業内容や教授法に問題があるからではなく、学生の学習動機が低いから」と考えてしまう可能性がある。偏見や思い込みを修正することは、授業改善を正しい方向で進めていくために不可欠である。また、学生の「やる気」の度合い別に学習動機を比較すると、「やる気のある学生」は向上心が高く、「やる気のあまりない学生」は将来志向が低かった。この結果を用いることで、「やる気のある学生」に対しては専門的な内容や幅広い教養が身につく授業を行い、「やる気のあまりない学生」に対しては自分の将来を模索できるような授業や指導を行う、といった工夫や対策がとれるようになる。学生の意識の実態を知ること、授業改善を実施していく上で重要であることは言うまでもない。

従来からある授業評価アンケートは、その名の通り、実施された授業に対して評価を行うものである。しかし、本研究のように、学生の「やる気」をどのようにしたら向上させられるのかという視点を組み込んで調査することで、様々な「やる気」の学生が授業に求めているものを明確

にできる。また、各大学における学生の様相を把握することで、そうした学生の背景を掴んだ上で授業に工夫を凝らしたり、学生を理解することが可能になる。さらに、教員アンケートによって、学生の実態と教員自身もつ学生に対する印象とのギャップを明らかにすることで、教員の偏見や思い込みを取り除き、授業だけでなく目の前の学生の対応も適切なものへと変えられる可能性がある。

いまや大学の存在意義や価値が問い直される時代となっている。大学改革は喫緊の課題であり、即効性のあるFDが求められている。本研究において開発した方法をFD研修会において活用し、情報を共有し、学生に対する認識を新たにすることで、真に有効なFDへと導くことができるだろう。学生に対する理解を深め、学生たちが求める要素を取り入れた授業改善こそが、大学の質をあげていくことにつながる。

引用文献

文部科学省 (2014) 『大学における教育内容等の改革状況について (概要)』

(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2014/11/18/1353488_1.pdf) (2015年3月2日閲覧)

平山弓月 (2011) 「FD実践 (教員研修)」 シンポジウム『組織的FDの取り組み～FD義務化から現在 (いま) ～』 2010年度第16回FDフォーラム報告集, 大学コンソーシアム京都主催

松本幸正・塚本弥八郎 (2004) 「CS分析の考え方を導入した授業評価アンケートの分析と授業改善ポイントの定量化」 京都大学高等教育研究 第10号, 21-32.

米谷 淳 (2007) 「学生による授業評価についての実践的研究」 大学評価・学位研究 第5号, 123-134.

中央教育審議会 (2008年) 『学士課程教育の構築に向けて (答申)』

中央教育審議会 (2012年) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』

文部科学省 (2012) 「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」 『「大学改革実行プラン」について』

(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/_icsFiles/afieldfile/2012/06/25/1312798_01.pdf) (2015年2月19日閲覧)

鈴木久男 (2009) 「クイズで授業を楽しもう」 清水 亮・橋本 勝・松本美奈 [編] 『学生と変える大学教育－FDを楽しむという発想』 ナカニシヤ出版, pp.166-184.

上野寛子 (2013) 「学生を魅了し、楽しい学習に導く」 清水 亮・橋本 勝 [編] 『学生と楽しむ大学教育 大学の学びを本物にするFDを求めて』 ナカニシヤ出版, pp.181-200.

天野憲樹 (2012) 「学生・教職員教育改善専門委員会 SweeTFooD」 木野 茂 [編] 『大学を変える、学生が変わる－学生FDガイドブック』 ナカニシヤ出版, pp.105-126.

木野 茂 (2012) 「学生FDサミット」 木野 茂 [編] 『大学を変える、学生が変わる－学生FDガイドブック』 ナカニシヤ出版, pp.69-102.

國吉和子 (2007) 「大学生の学習動機に関する研究」 沖縄大学法経学部紀要 8, 39-48.

付表1：学生に対する質問紙

アンケート調査へのご協力をお願い

このアンケートは、大学運営や学生生活の改善に向けた基礎資料とすることを目的としています。お忙しいところ大変恐縮ですが、大学をより良くするために本調査へのご協力をお願いいたします。

アンケートに先立ちまして、まずは以下の注意事項をお読みください。

<アンケートにご協力していただくにあたっての注意事項>

- ・質問の回答に正解・不正解はありません。それぞれの項目に、**思ったままを率直にお答えください**。
- ・質問部分は[1]～[4]に分かれており、表紙を含め**計6ページ**あります。ページの順にお答えください。
- ・それぞれの質問について、**質問文をよく読み、記入漏れがないよう**ご回答をお願いいたします。
- ・答えたくない質問に関しては、途中で回答をやめていただいてもかまいません。
- ・アンケートは無記名となっており、**個人が特定されることはありません**。また、ご回答いただいた内容は外部機関により数値化され、統計処理されます。
- ・アンケート用紙は厳重に管理し、分析後責任をもって処分いたします。

上記の内容を踏まえ、調査にご協力いただける場合は、学年を記入していただき、次のページへお進みください。

学年 []年

1

設問は、次のページに続きます。

あなたにとって、
今よりもやる気が出る授業とは……

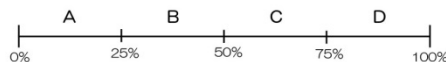
全く そう どちら 非常に
そう 思う 思う 思う
思わない ない いえ ば

教室の室温が、適切に管理されている。	1	2	3	4	5	6
先生の声の大きさが、ちょうどよい。	1	2	3	4	5	6
先生の話すスピードが、ちょうどよい。	1	2	3	4	5	6
先生の清音がよく、話している内容がちゃんと聞き取れる。	1	2	3	4	5	6
授業の難易度が、ちょうどよい。	1	2	3	4	5	6
授業の進むスピードが、ちょうどよい。	1	2	3	4	5	6
コメントペーパーなどの学生の質問(授業内容等に関する疑問など)に対し、答えてくれたり、解説してくれる。	1	2	3	4	5	6
コメントペーパーなどの学生の意見(授業方法に対する意見など)に対し、改善がなされる。	1	2	3	4	5	6
レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削が行われ、返却される。	1	2	3	4	5	6
自分の成績に対し、なぜ自分がその成績を取ったのかの納得がいく。	1	2	3	4	5	6
成績評価の基準が分かりやすい	1	2	3	4	5	6
板書やパワーポイントなどが見やすい。	1	2	3	4	5	6
文章だけでなく、図や動画などを活用して説明している。	1	2	3	4	5	6
配布資料が見やすく、分かりやすい。	1	2	3	4	5	6
授業の内容が、就職や進学に役立つものである。	1	2	3	4	5	6
授業の内容が、自分の見聞を広げるものである。	1	2	3	4	5	6
授業の内容が、専門性の高いものである。	1	2	3	4	5	6
授業の内容が、興味や関心が持てるものである。	1	2	3	4	5	6
毎週の授業が待ち遠しくなるほどの授業である。	1	2	3	4	5	6

3

[1]あなたの、大学の授業に対する姿勢をおたずねします。

あなたは授業に、何%くらいのやる気(授業を集中して聞き、内容を理解しようとする気持ち)をもって臨んでいると思いますか。A～Dのうち、自分と最も近いと思うところを一つ選んで、○をつけてください。また、「授業」は、現在履修している様々な授業を総合してお答えください。



[2]あなたにとっての「やる気が出る授業」についておたずねします。

あなたが大学の授業に出席するにあたって、どのように授業が変われば、今よりももう少しやる気が出ると思いますか。以下のそれぞれの項目をよく読み、その項目の通りに授業が変わればやる気が出ると思うかどうか、「1：全くそう思わない」～「6：非常にそう思う」の中からもっとも近いものを選んで○をつけてください。

あなたにとって、
今よりもやる気が出る授業とは……

先生が、具体例や先生自身の体験談など、理解の助けになる解説してくれる。	1	2	3	4	5	6
先生が、専門的な内容であっても、自分の身近なことと繋げられるように説明してくれる。	1	2	3	4	5	6
先生が、難しい言葉を使わずに説明してくれる。	1	2	3	4	5	6
授業の内容が、ためになるものである。	1	2	3	4	5	6
授業中の私語や出入りに対し厳しく注意がなされている。	1	2	3	4	5	6
受講人数に対して、ちょうどよい大きさの教室である。	1	2	3	4	5	6
先生が遅刻せず、授業の開始時間がきちんと守られている。	1	2	3	4	5	6
楽しい授業である。	1	2	3	4	5	6

2

[3]あなたの、大学で勉強する理由についておたずねします。

あなたは、どのような動機、理由、目標をもって大学に進学し、学んでいますか。以下のそれぞれの項目をよく読み、「1：全くあてはまらない」～「4：かなりあてはまる」の中からもっとも近いものを選んで○をつけてください。

大学進学や学習における
動機、理由、目標は……

自分の可能性を試したいから	1	2	3	4
自分をより高めたいから	1	2	3	4
本当の自分を見極めたい	1	2	3	4
自分の視野を広げたい	1	2	3	4
したいことを探したい	1	2	3	4
新しいことを知りたい	1	2	3	4
自分の将来を考えたい	1	2	3	4
立派な人間になりたい	1	2	3	4
学ぶことが将来役立つ	1	2	3	4
異性の友達と遊びたい	1	2	3	4
楽しい大学生活を経験したい	1	2	3	4
友だちを作りたい	1	2	3	4
大学で十分に遊びたい	1	2	3	4
色々な人と知り合いたい	1	2	3	4

4

かなりあてはまる
ある程度あてはまる
あてはまらない
全くあてはまらない

大学進学や学習における
動機、理由、目標は……

学歴がある方が得だから	1	2	3	4
いい仕事先を見つけるため	1	2	3	4
大学卒の学歴が欲しい	1	2	3	4
資格を取りたい	1	2	3	4
専門的な勉強をしたい	1	2	3	4
教養を身につけたい	1	2	3	4
将来希望する職業に就きたい	1	2	3	4
進学しないと親に悪いから	1	2	3	4
親に進学を勧められて	1	2	3	4
周りの人が進学するので	1	2	3	4
就職する気にならない	1	2	3	4
社会に出る自信がない	1	2	3	4
特にやりたいことがない	1	2	3	4
学生をやっていたい	1	2	3	4

設問は、次のページに続きます。

[4] 大学や授業に対し改善してほしい点がありましたら、具体的にお書きください。

以上で質問はすべて終了です。ご回答ありがとうございました。

ご質問・ご意見等ございましたら以下にご記入ください。

付表 2 : 教員に対する質問紙

アンケート調査へのご協力をお願い

このアンケートは、大学運営や学生生活の改善に向けた基礎資料とすることを目的としています。お忙しいところ大変恐縮ですが、大学をより良くするために本調査へのご協力をお願いいたします。

アンケートに先立ちまして、まずは以下の注意事項をお読みください。

<アンケートにご協力していただくにあたっての注意事項>

- ・それぞれの項目に、**思ったままを率直**にお答えください。
- ・質問部分は[1]~[3]に分かれており、表紙を含め**計 6 ページ**あります。ページの順にお答えください。
- ・それぞれの質問について、**質問文をよく読み、記入漏れがないよう**ご回答をお願いいたします。
- ・アンケートは無記名となっており、**個人が特定されることはありません**。また、ご回答いただいた内容は数値化され、統計処理されます。
- ・アンケート用紙は厳重に管理し、分析後責任をもって処分いたします。

上記の内容を踏まえ、次のページへお進みください。

先生は普通の授業で…

とても取り組んでいる
取り組んでいる
少し取り組んでいる
取り組んでいない
と

具体例や自身の体験談など、理解の助けになる解説をしている。	1	2	3	4
専門的な内容であっても、学生にとって身近なことと繋げられるように説明をしている。	1	2	3	4
なるべく難しい言葉を使わずに説明をしている。	1	2	3	4
授業の内容が、ためになるものであるようにしている。	1	2	3	4
授業中の私語や出入りに対し厳しく注意をしている。	1	2	3	4
受講人数に対して、ちょうどよい大きさの教室であるようにしている。	1	2	3	4
授業の開始時間をきちんと守っている。	1	2	3	4
楽しい授業であるようにしている。	1	2	3	4
強制的な授業が待ち遠しくなるほどの授業であるようにしている。	1	2	3	4
声の大きさが適切であるようにしている。	1	2	3	4
話すスピードが適切であるようにしている。	1	2	3	4
授業の内容が、興味や関心が持てるものであるようにしている。	1	2	3	4
授業の内容が、就職や進学に役立つものであるようにしている。	1	2	3	4
授業の内容が、自分の見識を広げるものであるようにしている。	1	2	3	4
授業の内容が、専門性の高いものであるようにしている。	1	2	3	4

	とて も取 り組 んで いる	取 り組 んで いる	少 し取 り組 んで いる	取 り組 んで いな い
教室の室温を、適切に管理している。	1	2	3	4
滑舌がよくなるように心がけ、話している内容がちゃんと聞き取れるようにしている。	1	2	3	4
授業の難易度を、学生に合わせている。	1	2	3	4
授業の進むスピードを、学生に合わせている。	1	2	3	4
コントペーパーなどで学生の質問(授業内容等に関する疑問など)に対し、答えたり、解説したりする。	1	2	3	4
コントペーパーなどで学生の意見(授業方法に対する意見など)に対し、改善策を取っている。	1	2	3	4
レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削を行い、返却している。	1	2	3	4
学生が、なぜ自分がその成績を取ったのか、納得がいくように評価している。	1	2	3	4
成績評価の基準を学生に分かりやすく示している。	1	2	3	4
板書やパワーポイントなどが見やすいものであるよう、工夫している。	1	2	3	4
文章だけでなく、図や動画などを活用して説明している。	1	2	3	4
配布資料が見やすく、分かりやすいものであるよう、工夫している。	1	2	3	4

設問は、次のページに続きます。

3

[2] 先生は、本学の学生が大学において、どのような動機、理由、目標をもって学んでいると思いますか。以下のそれぞれの項目をよく読み、「1: 全くあてはまらない」～「4: かなりあてはまる」の中からもっとも近いものを選んで○をつけてください。

	全 くあ ては まら ない	あ ては まら ない	あ る程 度あ ては まら ない	あ る程 度あ ては まら ない	か なり あて はま る
大学生の動機、理由は…					
自分の可能性を試したいから	1	2	3	4	
自分をより高めたいから	1	2	3	4	
本当の自分を見極めたい	1	2	3	4	
自分の視野を広げたい	1	2	3	4	
したいことを探したい	1	2	3	4	
新しいことを知りたい	1	2	3	4	
自分の将来を考えたい	1	2	3	4	
立派な人間になりたい	1	2	3	4	
学ぶことが将来役立つ	1	2	3	4	
異性の友達と遊びたい	1	2	3	4	
楽しい大学生活を経験したい	1	2	3	4	
友だちを作りたい	1	2	3	4	
大学で十分に遊びたい	1	2	3	4	
色々な人と知り合いたい	1	2	3	4	

[3] 先生は、学生が授業に対するやる気をより出せるようにするため、授業でどのような取り組みをしていますか。学生を「やる気があまりない学生」「やる気がある学生」「中間層」に分けたとき、それぞれの学生に対してどのような取り組みを行っているか、箇条書きでお書きください。

	全 くあ ては まら ない	あ ては まら ない	あ る程 度あ ては まら ない	あ る程 度あ ては まら ない	か なり あて はま る
学歴がある方が得だから	1	2	3	4	
いい仕事をみつけるため	1	2	3	4	
大学卒の学歴が欲しい	1	2	3	4	
資格を取りたい	1	2	3	4	
専門的な勉強をしたい	1	2	3	4	
教養を身につけたい	1	2	3	4	
将来希望する職業に就きたい	1	2	3	4	
進学しないと親に悪いから	1	2	3	4	
親に進学を勧められて	1	2	3	4	
周りの人が進学するので	1	2	3	4	
就職する気にならない	1	2	3	4	
社会に出る自信がない	1	2	3	4	
特にやりたいことがない	1	2	3	4	
学生をやっていたい	1	2	3	4	

設問は、次のページに続きます。

5

やる気があまりない学生	…に対する取り組み ex) 個別に、声掛けなどの気遣いを行っている。
中間層	…に対する取り組み ex) レポートやテストなどの課題に対し、採点や添削を行い、返却している。
やる気がある学生	…に対する取り組み ex) 通常の課題に加えて、より高度な課題を出している。

以上で質問はすべて終了です。ご回答ありがとうございました。

ご質問・ご意見等ございましたら以下にご記入ください。

6